クオリアを物質に還元することは可能か

－物的一元論の批判的検討－

松原亮介（人間学コース）

（指導教員：堂囿俊彦）

キーワード：クオリア、意識、脳、物的一元論、心身二元論、

序論

心に関する議論は数多く存在する。心と身体の関係、心そのものの存在論的身分、さらには自由意志や他者認識など、様々な議論が交わされてきた。その中の一つに、クオリアをめぐる議論がある。クオリアとは、赤いトマトを見た時に感じる赤さ、青空を見た時の青々とした感じなどの、人間の意識的経験に伴う独特の質感のことである。この論文では、クオリアと物的なもの（その中心は脳になる）との関係、具体的には、クオリアを物的なものに還元することは可能なのかを考察する。

第一章　心身問題に対する二つの立場

第一節　二元論と常識心理学

心身問題とは、心と身体の関係を問う、心の哲学において重要な領域である。この問題を解決するには、心がどういった性質を持つものかをはっきりとさせる必要がある。つまり、心とは何にも依らない独立した存在なのか（心身二元論）、それとも物的な立場から説明し尽くせるものなのか（物的一元論）ということである。

心身二元論は、心は身体から独立して存在するという立場である。二元論者の代表的な人物としてデカルトが挙げられる。彼の「心と身体は別の存在である」という主張は、私達が日頃「心」というものに抱いている感覚とそうかけ離れたものでは無いように感じられる。

第二節　二元論の困難

しかし、われわれの常識と合致するからと言って、二元論が心身問題を解決できると考えることはできない。二元論によっては説明が困難な問題が、心身問題には数多く存在する。（例えば、空間的位置を占めない心がどのよういして物質に影響を与えるのかという心身因果の問題。）そしてこれらの問題に対して、心身二元論は明確な解答を出すことができないのである。

第三節　物的一元論

それでは物的一元論はどうだろうか。物的一元論とは、心身問題は純粋に物的なもののみから説明可能であると主張する立場である。この立場では心が物的に説明できるのだから、心と身体の関係は物的なものと物的なものの関係になる（そして後者は十分に理解可能である。）しかしこの立場の問題は、「意識」といういわば内面的なものを説明できないということである。そこで、まず意識と不可分であるクオリアを物的なものに還元することによって、意識そのものが物的に還元可能であるかを検証する。意識と物的なもの（おそらく脳状態）を関連付けることができれば、意識とはどういったものであるかを検証する、足掛かりが得られるのではないか。

第二章　志向性に基づくクオリアの還元

第一節　クオリアの還元における物的一元論の問題点

クオリアはわれわれの経験に伴い意識に現れる質感である。信原によれば、経験は知覚的な心的状態と感覚的な心的状態とに分けられる。知覚的な心的状態とは、視覚・味覚・嗅覚など、外的なものに由来する情報をもとに構成されるものである。それに対し感覚的な心的状態とは、痛みや痒みといった、対象となるものが実際に存在しない心的状態である。そしてこれら両者にクオリアは伴う。そこで問題は、これら両者を物的なものへ還元できるかということである。

しかしこの試みは、知覚経験の還元を考えただけで困難に突き当たる。一つ目の問題は、知覚経験の還元先がどこであるかという問題である。さらにもう一つ、対応する実物が実際には存在しない知覚経験をどう説明するのか、という問題もある。これらの問題を例外化して知覚経験を還元できたとすることはできない。

第二節　志向性とクオリア①：知覚経験

こうした問題に取り組む哲学者として、信原幸弘が挙げられる。信原は前節で指摘した問題を解決するために、志向性に着目する。志向性とは、何かに向けられており、それによって何かを表しているということである。そしてわれわれの知覚経験もさまざまなものを表している以上、志向性をもつといえるのである 。このように、志向性を通じて何かを表すものは、表象と呼ばれる。

表象は、表象それ自体に備わる「内在的特徴」と、表象によって表されるものに備わる「志向的特徴」の二つをもつ。この区分を踏まえたとき、赤いトマトの表象の志向的特徴は

本要旨は、『2012 年度 静岡大学人文学部社会学科 卒論要旨集』第 9 号に掲載されたものを、本人の許可を得て掲載したものである。許可無く転載することを禁止する。

トマトの赤さ、内在的特徴を何らかの物的なもの――その最有力候補は脳状態――と考えることができる。そしてこれにより、上述した一つ目の問題は解決できる。

それでは二つ目の問題、すなわち幻覚や錯覚など表象される事柄が事実として存在しない場合をどのように考えればよいのか。ここで信原が有力だと考えるのが、知覚経験と表象の関係を知覚経験の機能から説明するという考え方である。ある機能を持つということは、その機能が誤動作する可能性を許容する。即ち、対応する実物が存在しない知覚経験を許容するのである。

第三節　志向性とクオリア②：感覚経験

感覚経験の還元は、知覚経験よりも難しい。なぜなら感覚経験は、対象となるものが存在しない以上、非志向的だからである。クオリアを志向的特徴とするには、感覚経験を志向的経験として捉え直す必要がある。

感覚経験が志向的でないとされているのは、経験によって表象される事柄が経験から独立していないからである。手に痛みが感じられるのに実際には手が痛くないということは想像するのが困難である。しかし、信原はこれに対して、手が痛いことと痛みの経験は確かに相伴って生じるが、これは痛覚神経の偶然的な在り方によるものではないかという疑問を呈する。このように考えれば、手が痛いことは手の痛みの経験から独立した客観的なものとして捉え直すことが可能である。痛みが客観的な性質だとすれば、痛みの経験は痛みを表象する志向的な心的状態である。感覚経験も知覚経験と同じように志向的であるといえる。

第三章　科学と常識

第一節　小林による物理主義批判

これまで信原の物的一元論によるクオリアの還元をみてきた。ここからは、小林道夫による物理主義批判を検証する。

小林による物理主義批判は、デカルトの二元論に基づいたものである。彼は物理主義の根底にある近代科学を「普遍的構造の追求」という、特定の目的の為に作り出された限定的なものと捉える。そしてこの目的のもとでは、心身の関係を理解する上で重要な役割を果たす日常経験が排除されてしまうと主張する。つまり近代科学を前提とした物理主義による心身問題解決は、そもそもカテゴリーミステイクであるというのが、小林による物理主義批判の主旨である。

第二節　小林による批判の問題点

しかし、この批判にはいくつか問題がある。一つは小林が想定する物理主義が限定的であるという点である。彼の想定している物理主義は、あらゆる心的活動を「ないもの」とする「消去主義」である。しかしこうした強い物理主義を批判するだけで物理主義の全てが批判できるわけではない。また、彼は常識と科学の関係を断絶的に捉えているが、いまの常識は多くの科学的知識を前提として成り立っているのである。

第三節　物理主義は日常経験をどこまで説明できるか

小林の主張するような科学と常識の関係は本当に正しいのか。本節では両者の関係が顕著である、自由意志と他者認識について、小林、信原両者の見解を検討する。

小林は、完全な自由意志の存在を積極的に主張する。一方、他者認識については明確な解答はなく、自由な主体同士による相互的な言語行為によってのみ可能であると主張する。一方信原は、自由意志の存在については言及せず、小林の言うところの「行為の自由」（消極的自由）という限定的な自由を人間の自由とする。他者認識については、クオリアの還元から意識と物的なものの繋がりを見出すことによって、他者の存在ははっきりとしたものになるとしている。

結論

小林の二元論と信原の物理主義は、果たしてどちらが正しいのだろうか。心が物理的世界に生きるわれわれに備わるものだというのは、心について考える際の大前提である。そうであるなら、多少なりとも物的なものと関係を持つものであるとするほうが自然ではないか。信原の主張は、その点において大変有力である。

確かに、心が実は物理的なものであるという主張は、それだけでは受け入れがたいもののように思われる。しかし、信原の主張する物的一元論は、小林の批判する、あらゆる心的活動を否定するような強力な物理主義（消去主義）ではない。信原による物理主義は、心的なものを理解するために、物理的な基盤による階層的秩序の構築を目指す理論なのである。この理論は、研究を通じて新たな性質が発見されれば、それを組み込み、新しい階層的秩序に組み替える柔軟さをもっている。このような階層的秩序の下では、消去主義のように、心的なものがその存在を認められないといったことはない。

そして物的一元論によって構築されるこの階層的秩序が、小林などの二元論者から寄せられる批判――その中には自由意思の問題も含まれる――をクリアできる可能性は十分にある。われわれの常識に即した二元論は確かに納得のしやすいものではあるが、そこで安易に二元論に落ち着くのではなく、心を自然的に位置づけ、物的世界に生起する自然現象として理解しようと試みることで、心についてさらに理解を深めることが可能になるのではないか。

主要参考文献

- 信原幸弘『意識の哲学――クオリア序説――』, 岩波書店, 2002 年.
- 小林道夫『科学の世界と心の哲学－心は科学で解明できるか－』, 中公新書, 2009 年.
- スティーブン・プリースト『心と身体の哲学』勁草書房, 1999 年.

本要旨は、『2012 年度 静岡大学人文学部社会学科 卒論要旨集』第 9 号に掲載されたものを、本人の許可を得て掲載したものである。許可無く転載することを禁止する。